

大学生が親密な対人関係に求める機能

——親子関係・恋愛関係・友だち関係からの包括的アプローチ——

藤 本 学

(立命館大学教育開発推進機構)

本研究は、大学生の心理・社会的適応の改善に向けた基礎研究として、親密な対人関係が持つ汎用的な機能を特定した上で、大学生がそれらをどのような親密な対人関係に求めているのかについて明らかにすることを目的とする。親密な対人関係として親子関係（父親・母親）、恋愛関係（恋人）、友だち関係（親友・友人）に注目する。はじめに、自由記述アンケートを行った。それにより32種類の機能を得た。次に、親密な対人関係に対する機能のニーズについて質問紙調査を行った。多重コレスポネンシ分析により、「教導」・「養育」・「愛着」・「友情」・「交友」からなる機能群が特定された。続いて、 χ^2 検定により、大学生は親子関係に「教導」と「養育」を、恋愛関係に「愛着」を、友だち関係に「友情」と「交友」を主に求めつつ、それらを他の親密な対人関係にも重複して求めていることが明らかになった。最後に性差について、 χ^2 検定により、親密な対人関係に男子学生は道具的な機能を優先的に求めていること、また、女子学生は男子学生よりも多様な機能を求めていることが明らかになった。これらの知見は、大学生の適応支援に関する実践的取り組みに示唆を与えるものである。

キーワード：対人関係の機能，大学生，親子関係，恋愛関係，友だち関係
立命館人間科学研究，No.37，47-62，2018.

I. 問題と目的

親密な他者と良好な対人関係を築き、状況により適切な対人関係を選択することは、青年期後期にあたる大学生の心理・社会的適応において重要な意味を持つ。それは、親密な対人関係が大学生に多様な機能を提供するためである。本研究は社会的交換理論の観点から、大学生が親密な対人関係にどのような機能を求めているのかについて、包括的な検討を行う。

1. 欲求充足システムとしての対人関係

人は他者に依存しながら生きている。個人が問題を抱え、それを自身の力だけで解決できな

い場合は、他者に援助を求める必要がある（永井 2010）。自分の能力の不足部分を他者に求めて補うことは、一般的な対人関係における依存の適応的機能である（竹澤・小玉 2004）。この依存性は発達とともに変容していき、自立の獲得に向けて重要な役割を果たす（江口 1966）。そのため、多くの人が自分の不足しているものを満たしてくれる存在を求め、対人関係を結ぼうとする。

社会を相互作用し合う複数の要素のまとまりとして捉えたものを社会システムという。社会システム論を代表する研究者の一人である Homans (1950) は、対人関係を集団社会の模型として捉え（小川 1976）、それを感情や資源のやり取りという統一的な概念によって説明し

ている。ここで交換されるのは、物や金銭だけではなく、愛情やサービスなど多岐にわたる (Foa 1971)。このような対人関係を成果の面から説明しようとする考え方を、社会的交換理論と総称する。

社会的交換理論の一つに Kelley & Thibaut (1978) の相互依存性理論がある。対人関係研究の多くは、相互依存性理論の流れを汲む (中村 2012)。この理論によると、個人は対人関係から何らかの成果を得るときに満足感を覚え、自分の周りにこれを上回る対人関係を見出せないときに、現在の関係へのコミットメントを高める。コミットメントは実際に関係を続けていくか否かの決定因となる (Le et al. 2010)。すなわち、個人が対人関係を継続させるか解消するかは、その関係が自らに最も利益をもたらすか否かによって決まる。

Rusbult (1983) は、相互依存性理論に相手にこれまでどれだけの物質的・精神的な資源を投資してきたのかを加味した投資モデルを提唱している。このモデルによると、相手に依存しているほどコミットメントは強くなる (Rusbult & Van Lange 2003)。相手への依存性は、現在の関係に満足し他により良い関係が無いだけでなく、すでに多くの投資をしているときに高くなる。それは、関係を解消することでこれまでの投資が無駄になり、また、共有する資産や共通の人間関係などを失ってしまうためである。ゆえに、人は関係解消時の損失も考慮に入れて、現在の関係へのコミットメントを決定する。投資モデルは、関係の継続を予測するモデルとして多くの対人関係研究で用いられており、その有効性が実証されている (Le & Agnew 2003)。

以上、対人関係研究の基盤となる諸理論は、対人関係を「個人が利益を得るためのシステム」と見なしている。本研究もこれに従い、対人関係が持つ機能を「対人関係が自己の欲求を満たすはたらき」と定義する。対人関係を欲求充足

システムと捉えれば、自らの期待に相手が十分に応えるとき、その対人関係は機能していることになる。

以下では、大学生が親密な対人関係を何を求めているのかについて概観する。

2. 大学生にとって親密な対人関係が持つ機能

大学生は在学中に社会人としての自己を確立し、将来に向けて明確な展望を持たなければならない。成人期を目前に控え、アイデンティティの再構成を迫られる彼らにとって、親密な対人関係に適切に依存することは、重要な社会的課題である。

親密な対人関係は母子関係から始まる。乳幼児にとって、母親は生存のために欠かすことのできない中核的な存在であり、身の回りの世話など道具的な機能を提供し、愛着を形成する情緒的な対象となる (Bowlby 1969)。また、父親も子どもの世話や母親のサポートなど、直接・間接的に育児にかかわっている (Bowlby 1969; 佐々木 1996)。親子関係の中で形成される愛着スタイルは、その人の対人関係に対する態度に反映され (Main et al. 1985)、恋愛関係 (Hazan & Shaver 1987) や友だち関係 (Furman et al. 2002; Grabill & Kerns 2000; Mayselless 1993) に影響を及ぼす。すなわち、多くの人にとって親は人生全般に関わる根源的な存在なのである。杉村 (2001) は、恋愛関係と友だち関係が大学生のアイデンティティの探求に深く関わるとともに、大学生になっても家族との関係は依然として重要な役割を担い続けていると指摘している。

親密な対人関係は発達に伴って多様化する (O'Donnel 1976)。青年期初期になると自己への関心が高まる (小高 2008)。子どもとして見られることを拒み、自立したいという欲求が現れる。それに従い、同性・異性との親密な対人関係を構築するようになる (Havighurst 1953)。

最も重要な対象も「親」から「友だち」、そして「恋人」へと移行していく（Hazan & Zeifman 1994）。そして、対人関係とその機能は、アイデンティティの獲得が重要な発達上の主題となる青年期後期（Erikson 1959）において最も多様化する。それは、アイデンティティの安定と補充において、親密な対人関係から得られるサポートが重要な役割を果たすためである（Cohen & Wills 1985）。

3. 親密な対人関係の希薄化が大学生の適応状態に及ぼす影響

近年、心理・社会的に不適応状態を示す学生の増加が深刻化している（内田 2009）。大学生が親子関係に依存するに従い（平石 2006）、親子関係の質が彼らの適応に強く影響するようになった。丹羽（2005）は関連研究を概観し、親への愛着は自尊感情・抑うつ・アイデンティティ・大学適応への適応・情動制御などにポジティブな影響を与えると述べた上で、親に対する愛着不安が高い大学生ほど、心理・社会的適応状態に問題を抱えていることを明らかにしている。また、親と仲が悪い大学生ほど、親に対して積極的に情緒的な援助を求めないことが分かっている（池田 2000）。それは、援助を求めても、親子関係からポジティブな援助が得られないと予期するためである（武田・石田 2013）。

一方で、近年若者の恋愛離れが進んでいる（国立社会保障・人口問題研究所 2015）。それは、恋愛関係はポジティブな効果を持つ一方、「拘束感」や「関係不安」などネガティブな側面も併せ持っているためである（高坂 2009）。しかし、恋愛を不要と考えている大学生ほど、アイデンティティが確立しておらず精神的健康も悪い傾向にある（高坂 2011）。大学生にとって、恋愛関係はアイデンティティの確立にポジティブな影響を及ぼすとともに（北原他 2008）、自尊心や充実感を高め、抑うつを低下させる効果を持つ

ているのである（神薗他 1996）。

友人関係の希薄化も深刻である（落合・竹中 2004）。対人関係に関する学生相談は、年々増加しており（社団法人日本私立大学連盟 2015）、大学不適応の一因として「人間関係の問題の多さ」が挙げられている（磯部他 2006）。最近では、大学において一人で過ごしたり、他者とうまくコミュニケーションが取れずに孤立したり、傷つくことを恐れて他者と距離を置いたりする「相手のいない対人関係」化が進んでいる（竹淵 2016）。満野・今城（2016）によると、希薄な友人関係を求める学生は「関係自体を回避する群」と「過剰に相手を気遣う群」に分かれるが、どちらも関係の開始や継続に困難さを感じて心理的・社会的適応がうまく進まないという。

以上、親密な対人関係の問題は、大学生の心理・社会的な不適応状態を招く恐れがある。先行研究は、その原因として、対人関係が持つネガティブな側面（高坂 2009）や傷つくこと（竹淵 2016）を避けたいという動機を挙げている。これを投資モデルに当てはめれば、近年の大学生は親密な対人関係におけるコストを高く、報酬を低く見積もる傾向にあり、傷つくことを恐れて初めから投資そのものを避けようとしていると説明することができる。親密な対人関係の形成・維持に必要なのは、その関係からコストを上回る報酬が得られると思えるかどうかにある。大学生の親密な対人関係へのコミットメントを高めるためには、これらの関係から自分の求める報酬が得られると予期させる必要がある。そのため、大学生が親密な対人関係に何を求めているのかを理解しなければならない。

4. これまでに特定されている親密な対人関係の機能

親密な対人関係が持つ機能は、これまでそれぞれの関係性の文脈で検討されてきた。

はじめに、親子関係については、近年、青年

期後期の長期化に伴い若者の自立が進まず、親子双方が相互依存関係を求めるようになっていくことが指摘されている(平石 2006)。そのため、親が子を養育するという機能は、青年期後期になっても依然として影響力を持ち続けている。大島(2014)によると、この養育機能は、行動面や心理面を管理する「統制」と、受容や感受性、親子間の情緒的な絆や愛着などの「情緒的な関係性」の2つの次元に大別される。

次に、恋愛関係については、思春期(青年期初期)以降において大きな役割を果たすようになる(Hazan & Shaver 1987)。恋愛関係が持つ機能は、恋愛スタイルや愛着の観点から研究されてきた。例えば、山口(2009)は大学生の愛着機能として「安全な避難所」、「安全基地」、「近接性の維持」を特定している。これらの機能はいずれも、困ったときや困難に立ち向かう際のサポート期待と関係している。また、恋愛関係の機能を直接扱った研究では、恋人に「信頼・支援」や「積極的交流」を求めることが明らかになっている(高坂 2010)。山口(2009)の挙げた3機能は、前者の「信頼・支援」に相当する。したがって、自らを受け入れ励ましてくれる「信頼・支援」と、いつも楽しく一緒に過ごす「積極的交流」は、青年期後期において恋愛関係が持つ2大機能であると考えられる。これらの機能を通して、恋愛関係は大学生の人格発達や心理・社会的適応に強く影響し(安達 1994)、自己の成長や心理的な充足をもたらす(高坂 2009)。

最後に、友だち関係については、児童期から思春期への過渡期に、群れの友人関係から、互いに相手を思いやる一対一の親友関係が派生する(Sullivan 1954)。親友と友人という2種類の友だち関係が持つ機能は、下斗米(2000)や吉岡(2001)、丹野(2008)などによって多数挙げられているが、それらは「親密性機能」、「安定性機能」、「支援機能」の3つに集約される(小

塩 2013)。これらの機能を満たし合う中で、友人は親友へと深化していく。友だち関係の深化について、表面的な友だちしかいない者は不適応状態に陥りやすいことが明らかになっている(岡田 2007)。このように、大学生にとって友だち関係、特に親友との関係は重要な役割を果たしている。

以上、親密な対人関係の機能は、これまで親子関係・恋愛関係・友だち関係ごとに個別に研究され、それぞれの関係性の文脈において解釈されてきた。しかしながら、例えば、友だち関係において同定された親密性・安定性・支援という3機能は、親友や友人に特有のもので、親や恋人には求められないのであろうか。この問いに対し、人は何らかの道具的・情緒的サポートが必要になると、自らの対人関係の中から、それを充たしてくれそうな人に支援を求めるという指摘がある(若尾 2001)。機能を求める対象を状況に応じて選ぶのであれば、対象ごとに機能を検討するよりも、親密な対人関係に共通する汎用的な機能を特定する方が実態に即していると考えられる。

5. 男性と女性の機能のニーズ

親子関係・恋愛関係・友だち関係に対する機能のニーズには、性差が見られることが知られている。女性は男性よりも父母を心の支えにするなど親との情緒的な結びつきが強い(小野寺 2009)。また、友だちに対し、男性は一緒に行動することを求める一方、女性は情緒的な相互作用を強く求め(和田 1993; 榎本 1999)、実際に友だちから情緒的サポートを多く受けている(福岡・橋本 1995)。このように、女性は男性よりも親密な対人関係に情緒的に依存している。ただし、恋愛関係において女性は実利的であると言われ、献身的な恋愛傾向を示す男性とは対称的である(松井他 1990)。

大学生のアイデンティティの形成において親

密な対人関係は重要な役割を果たす。そのため、アイデンティティの形成における性差が、機能のニーズに影響を及ぼしている可能性がある。アイデンティティが形成されたか否かの判断を、男性は学位取得や経済的成功といった客観的な基準で行うのに対し、女性は重要な他者との相互作用を基に行うという (Josselson 1973)。これは、男性が自立を要請されて成長していくのに対し、女性は他者とのつながりを重視しながら成長していくためである (Chodorow 1978)。ただし、このような伝統的性役割は失われつつあるという指摘もある (杉村 2001)。生物学的な影響が強いのであれば女性の方が男性よりも親密な対人関係に多くを求めるであろう。一方、それらの差が社会的な要請によるもの、すなわち性役割の影響であれば、近年の社会情勢の変化から機能のニーズに性差は見られないはずである。

また、個人と対象者が同性か異性かによって、機能のニーズが異なる可能性がある。この問題は親子関係において重要な視点である。なぜならば、恋愛関係は多くの場合異性であり、友だち関係は他の親密な対人関係と異なり複数の相手と同時並行的に関係を結んでいるためである。同性・異性の親に対する大学生の依存性に関して、渡辺 (1997) は性同一性の獲得の観点から、息子は母親からの自立を目指し、女子は母親に情緒的に依存し続けると指摘している。藤田・岡本 (2010) によれば、母子関係に依存している女子学生は全体の 64.7% に上るといふ。対して、父子関係に関する心理学的な研究は少なく、そのほとんどが父性の発達や育児への関わりに限られている (阿部 2016)。親子関係の依存性に関する子と父母の性別の相互作用を明らかにするためには、父子関係の依存性に関する知見の積み上げが求められる。

6. 本研究の目的

本研究は、大学生の心理的・社会的適応の向上に向けた対人関係に関する基礎研究として、大学生が親密な対人関係に求める機能のニーズについて明らかにする。そこで、はじめに汎用的な機能の同定を試みる。その際、父親・母親・恋人・親友・友人という親密かつ重要な対象との対人関係を包括的に扱う。親を父と母、友だちを親友と友人に区分したのは、嶋 (1991) に従ったものである。次に、大学生が機能をどのような親密な対人関係に求めているのかについて、性差を含めて検討を行う。

II. 方法

1. 予備調査

(1) 機能に関する項目の収集

大学生 253 名 (男性 98 名, 女性 155 名; 平均年齢 20.14 歳, $SD1.46$) に自由記述アンケートを実施した。多様な項目を収集するために、親は親子関係の発達の变化を踏まえて「幼児期」, 「児童期」, 「思春期」, 「青年期後期」に、友だちは重要度の違いから「親友」と「友人」に区分した。これらに「恋人」を加えた 7 つの質問事項について、機能の概念について説明した上で、「親密な相手との関係は、あなたにとってどのような機能を持っていますか」という教示を与え、質問紙に回答を求めた。

(2) 項目の集計と整理

アンケートを集計した結果、7573 回答が得られた。はじめに、これらの回答を研究協力者である 8 人の大学生が協議を行い、重複または意味的に近似している回答を 60 カテゴリーに分類・整理した。次に、不適項目として、「感謝している」など対象に対する評価の 10 カテゴリー、「利用できて便利」など打算的な 11 カテゴリー、「性的行為」など明らかに特定の対象に限定され

る7カテゴリーを除いた。以上により得られた32カテゴリーから、各カテゴリーを代表する回答を1つ選び、機能を表す項目とした(表1)。最後に、項目の表現について、そのままでは相手を連想しづらいという意見が研究協力者から出たため、項目の語尾を「○○な人」のように対象を表すものに改めた。

表1. 対人機能群

No	項目 (対人機能)	対人機能群	
		3対象	5対象
4	正しい方向に導いてくれる人	教導 (父親近傍)	
5	護ってくれる人		
20	アドバイスをしてくれる人		
26	助けてくれる人		
28	才能を育ててくれる人		
1	叱ってくれる人	養育 (母親近傍)	
2	身の回りの世話をしてくれる人		
6	良き理解者		
16	ほめてくれる人		
8	わがママを聞いてくれる人		
23	自分のことを愛してくれる人	愛着 (恋人近傍)	
24	素の自分をさらけだせる人		
9	一緒にいると安心できる人		
10	心の結びつきを感じられる人		
15	大事なことを話すことができる人		
17	癒してくれる人	友情 (親友近傍)	
19	自分の居場所と思える人		
22	幸せな気持ちにしてくれる人		
31	甘えさせてくれる人		
32	一緒にいると落ち着ける人		
11	いつも一緒にいる人	交友 (友人近傍)	
14	一緒にいると充実感が得られる人		
27	相談相手		
12	優しくしてくれる人		
3	自分を必要としてくれる人		
7	励ましてくれる人		
13	電話やメールの相手		
21	親近感を持つことができる人		
29	一緒にいると楽しい人		
30	やる気を起こしてくれる人		
18	情報を交換する相手		
25	遊び仲間		

2. 本調査の手続き

大学生に質問紙を一斉に配布し、その場で回答を求め、個別に提出してもらった。併せて、5対象が現存するか確認し、父親・母親のいずれかまたは両方がいないと答えた者を分析から除外した。親友と友人については、いないと答えた者はいなかった。恋人については、現在該当する人がいなくても恋人が欲しいと思っている回答者は、恋愛関係に何らかの機能を求めていることから、分析に加えることにした。その結果、サンプル数は485名(男性151名、女性334名、平均年齢19.52歳、SD1.87)になった。

3. 本調査の使用項目

予備調査で得た32項目について、「あなたの他者への期待についてお聞きます。以下のような存在になってほしい対象を、選択肢の中から全て選んでチェックしてください。そのような存在が不要な場合は誰にもチェックしないでください」と教示を与え、父親・母親・恋人・親友・友人の中から、該当する存在の全てにチェックするように求めた。

4. 倫理的配慮

著者の所属機関における研究倫理委員会の規定に基づき調査を実施した。調査の実施時には、調査参加者に研究目的、個人情報扱い、成果の公開に関する説明を書面と口頭で行い、研究への同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 対象と項目の布置

本研究のデータは、対象×機能×回答者の三相構造を持つ。そこで、5対象と32機能の全体的な位置関係を明らかにするために、対象×機能のクロス集計表を用いた多重コレスポnden

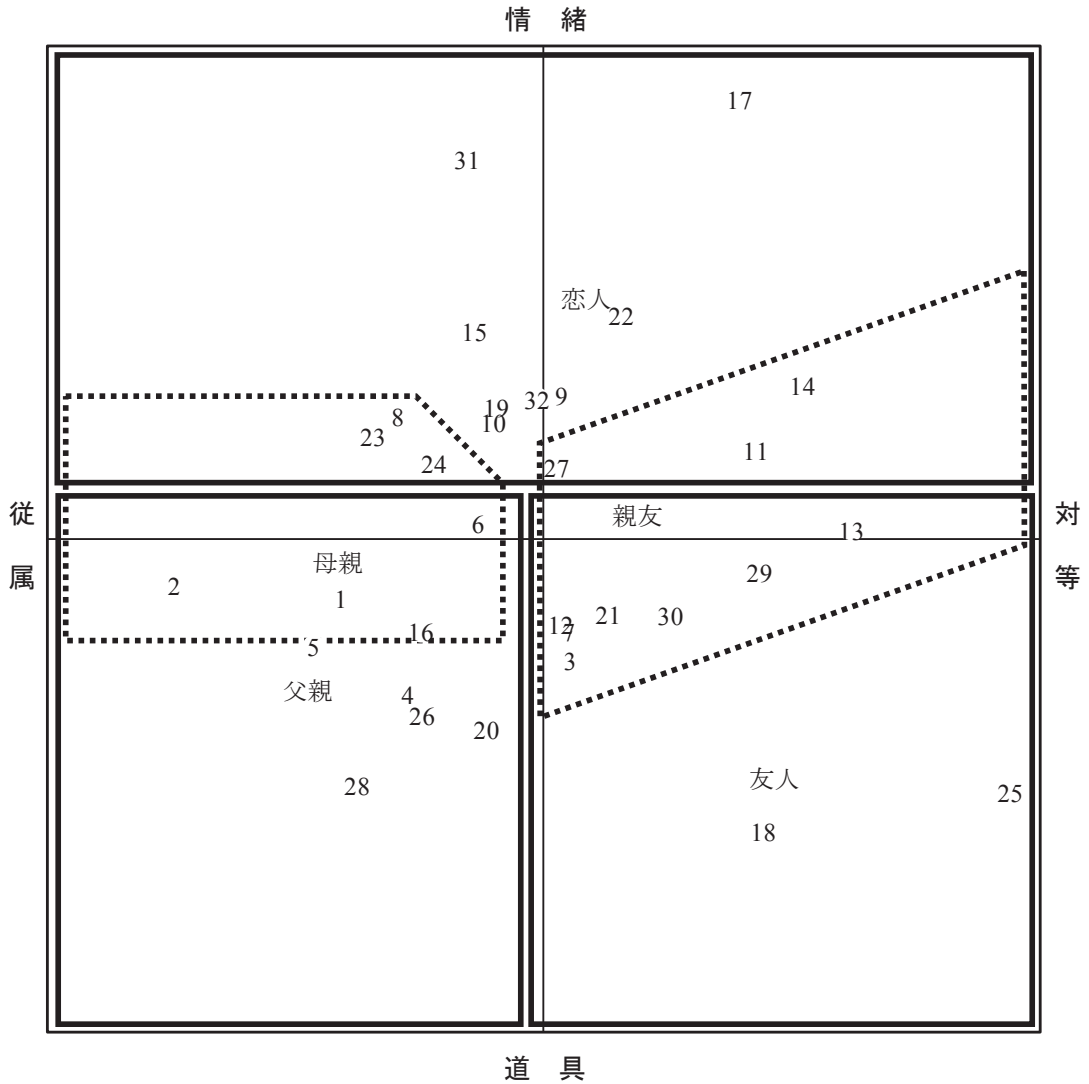


図1. 対象と対人機能の布置, および機能群の範囲

注. 図中の数字は項目番号（表1参照）。

ス分析を行った。¹⁾

1) 性別をはじめ、地域や文化、学年など様々な個人差があると考えられるが、本研究は親密な対人関係に共通の機能を同定することを目的としているため、全データを用いてコレスポネンス分析を行った。ちなみに、男女別に分析した場合、男性で6項目、女性で3項目が別のカテゴリーに移った。そのうちの7項目は父親-母親-恋人-親友-友人の並びにおいて、隣接するカテゴリーに移った。そのため、構造的に男女で大きく異なっていないと考えられる。男性の2項目（No.15, 27）のみ、恋人と親友から父親に移動していたが、これは男性が父親に求める機能（p.7, 1.22）を反映したものと考えられる。

はじめに、対象の布置に注目すると（図1）、父親・恋人・友人が三角形を形成していた。そして、母親は父親-恋人を結ぶ線上で父親に近待し、親友は恋人-友人を結ぶ線上でやや恋人寄りに布置していた。

次に、機能の分類を行った。それぞれの機能から三角形を形成する3対象（父親・恋人・友人）まで、さらに母親と親友を加えた5対象までの距離を三角定理によってそれぞれ算出し、最も近い対象に分類した。その結果、3対象におい

ては父親に近傍する機能が9, 恋人に近傍する機能が14, 友人に近傍する機能が9になった。また, 5対象においては父親に近傍する機能が5, 母親に近傍する機能が7, 恋人に近傍する機能が8, 親友に近傍する機能が10, 友人に近傍する機能が2になった(表1)。

父親に近傍する機能群は「護ってくれる人」や「正しい方向に導いてくれる人」などの項目を含むことから、「教導」的な性質を持つと考えられる。次に, 母親に近傍する機能群は「身の回りの世話をしてくれる人」という道具的な機能とともに、「良き理解者」という情緒的な機能も併せ持っていることから、「養育」的な性質を持つと考えられる。続いて, 恋人に近傍する機能群は「一緒にいると安心できる人」や「大事なことを話すことができる人」などの項目を含むことから、「愛着」的な性質を持つと考えられる。そして, 親友に近傍する機能群は「いつも一緒にいる人」や「やる気を起こしてくれる人」などの項目を含むことから、「友情」的な性質を持つと考えられる。最後に, 友人に近傍する機能群は「情報を交換する相手」と「遊び仲間」の2項目からなることから、「交友」的な性質を持つと考えられる。

2. 機能のニーズの対象間差

大学生の親密な対人関係に対する機能のニーズを明らかにするために, 対象×機能の χ^2 検定を行った(表2)。その結果, 対象間に有意な差が見られた($\chi^2(124)=3904.52, p<.01$)。残差分析の結果, 大学生は父親と母親の双方に対して「教導」と「養育」を求めている。加えて, 母親には「愛着」もある程度求めているのに対し, 父親にはあまり求めていなかった。恋人に対しては「愛着」を広く求めるとともに、「友情」もある程度求めている。親友と友人に対してはともに「友情」と「交友」を求めている。加えて, 親友には「愛着」もある程度求めている。

表2. 機能群と対象の残差分析

No	残差分析									
	父親	母親	恋人	親友	友人					
4	70.9	△	76.3	△	63.9	▼	80.0	▼	45.2	▼
5	66.6	△	67.2	△	56.7	▼	51.1	▼	27.4	▼
20	61.2	△	76.7	△	65.8	▼	87.4		60.8	
26	71.5	△	79.4	△	64.3	▼	84.9		49.9	▼
28	50.3	△	59.8	△	35.7	▼	50.9	▼	30.1	▼
1	64.7	△	79.4	△	62.1	▼	67.4	▼	29.3	▼
2	35.5	△	74.6	△	37.3	▼	18.8	▼	13.8	▼
6	53.2	△	70.3	△	76.5		88.0		42.9	▼
16	63.9	△	77.5	△	74.2		67.0	▼	48.0	▼
8	44.3	△	61.9	△	68.2	△	53.0	▼	25.2	▼
23	64.7	△	71.1	△	89.1	△	53.8	▼	32.0	▼
24	54.2	△	63.9	△	71.3		82.9		28.7	▼
9	37.9	▼	56.1		86.6	△	84.3		44.7	▼
10	45.8		59.4		77.5		82.9		34.8	▼
15	34.6		61.4	△	67.6		85.8	△	21.9	▼
17	8.2	▼	24.5	▼	83.3	△	61.2		37.1	
19	42.9		59.0		78.6	△	76.3		35.5	▼
22	30.5	▼	39.4	▼	89.5	△	72.2		44.5	
31	30.3		50.1	△	81.9	△	48.5	▼	21.0	▼
32	39.8		57.1		81.9	△	84.9		39.8	▼
11	13.0	▼	22.1	▼	54.6	△	68.2	△	42.9	△
14	13.4	▼	20.4	▼	76.7	△	83.3	△	56.5	△
27	29.7	▼	57.7		62.7		89.1	△	38.1	▼
12	47.8		60.4		79.6		73.4	▼	64.5	△
3	56.3		62.1	▼	83.9		87.6		72.6	△
7	46.4		64.7		76.1	▼	88.7		64.7	△
13	10.1	▼	24.1	▼	79.6	△	82.9	△	78.4	△
21	37.5		46.2	▼	61.9	▼	88.0	△	53.2	△
29	25.8	▼	35.1	▼	86.8	△	92.4	△	81.9	△
30	28.9	▼	37.5	▼	62.1		76.7	△	57.7	△
18	27.8	▼	37.7	▼	60.0	▼	87.6	△	90.1	△
25	2.7	▼	7.6	▼	56.3		89.1	△	93.0	△

注. Noは表1参照。数値は485人中の%。
有意水準5%で△は多い, ▼は少ない。

3. 機能のニーズの性差

男女の違いによって, 親密な対人関係に求める機能のニーズに違いがあるのかについて検証するために, 対象ごとに性別×機能の χ^2 検定を行った(表3)。ここでは対象ごとの性差を個別に検定しているため, 性差について対象間で単

表 3. 対象別の性差の残差分析

No	父親		母親		恋人		親友		友人					
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性				
4	74.2	△ 69.5	▼	67.5	80.2	53.0	68.9	76.2	81.7	42.4	46.4			
5	56.3	71.3	54.3	73.1	25.2	▼ 71.0	△	49.7	51.8	21.9	29.9			
20	66.2	△ 59.0	▼	65.6	81.7	58.9	68.9	86.8	87.7	58.9	61.7			
26	68.2	73.1	70.2	83.5	49.0	▼ 71.3	△	83.4	85.6	46.4	51.5			
28	49.0	50.9	48.3	65.0	35.8	35.6	58.9	△ 47.3	▼	31.8	29.3			
1	70.9	△ 62.0	▼	72.8	▼ 82.3	△	58.3	63.8	57.0	72.2	27.2	30.2		
2	31.8	37.1	60.3	81.1	45.7	△ 33.5	▼	13.2	21.3	11.9	14.7			
6	53.0	53.3	57.6	76.0	75.5	76.9	86.1	88.9	40.4	44.0				
16	50.3	70.1	58.3	86.2	66.9	77.5	57.6	71.3	37.1	53.0				
8	28.5	▼ 51.5	△	43.7	70.1	58.3	72.8	51.0	53.9	29.8	△ 23.1	▼		
23	47.0	▼ 72.8	△	47.7	81.7	86.8	90.1	34.4	▼ 62.6	△	17.9	▼ 38.3	△	
24	45.0	58.4	47.7	71.3	70.9	71.6	85.4	81.7	27.2	29.3				
9	32.5	40.4	37.1	64.7	86.1	86.8	75.5	88.3	42.4	45.8				
10	44.4	46.4	47.7	64.7	76.2	78.1	76.2	85.9	31.8	36.2				
15	43.0	△ 30.8	▼	49.0	67.1	68.2	67.4	84.1	86.5	18.5	23.4			
17	4.6	9.9	10.6	▼ 30.8	△	86.8	81.7	36.4	▼ 72.5	△	19.2	▼ 45.2	△	
19	37.7	45.2	43.7	65.9	82.1	76.9	69.5	79.3	30.5	37.7				
22	21.2	34.7	25.8	45.5	85.4	91.3	56.3	79.3	39.7	46.7				
31	16.6	▼ 36.5	△	25.2	▼ 61.4	△	74.2	85.3	30.5	▼ 56.6	△	12.6	▼ 24.9	△
32	36.4	41.3	45.0	62.6	81.5	82.0	78.8	87.7	39.7	39.8				
11	13.2	12.9	13.2	26.0	55.0	54.5	57.6	73.1	38.4	44.9				
14	11.3	14.4	9.3	▼ 25.4	△	75.5	77.2	80.1	84.7	53.6	57.8			
27	36.4	△ 26.6	▼	45.0	63.5	59.6	64.1	90.1	88.6	39.7	37.4			
12	34.4	53.9	45.0	67.4	74.2	82.0	62.9	78.1	51.0	70.7				
3	41.7	62.9	43.0	70.7	80.1	85.6	78.1	91.9	64.9	76.0				
7	37.7	50.3	49.0	71.9	73.5	77.2	80.1	92.5	56.3	68.6				
13	11.3	9.6	13.2	29.0	73.5	82.3	75.5	86.2	73.5	80.5				
21	37.7	37.4	39.7	49.1	64.9	60.5	86.8	88.6	51.7	53.9				
29	15.2	▼ 30.5	△	15.9	▼ 43.7	△	82.8	88.6	93.4	91.9	80.8	82.3		
30	27.8	29.3	30.5	40.7	61.6	62.3	72.2	78.7	47.0	62.6				
18	24.5	29.3	29.1	41.6	60.3	59.9	88.1	87.4	86.8	91.6				
25	2.0	3.0	2.0	▼ 10.2	△	53.0	57.8	91.4	88.0	93.4	92.8			

注. No は表 1 参照。数値は男性 151 人中，女性 334 人中の％。有意水準 5% で△は多い，▼は少ない。

純に比較することはできない点に留意する必要がある。分析の結果，はじめに，父親に対しては ($\chi^2(31) = 78.98, p < .01$)，男性は指導的立場を求め，女性はわがままを聞き甘えさせることを求めている。次に，母親に対しては ($\chi^2(31) = 61.07, p < .01$)，女性は男性よりも，癒して甘え

させるとともに，友だちのように接することを求めている。続いて，恋人に対しては ($\chi^2(31) = 57.43, p < .01$)，男性は身の回りの世話を求め，女性は護り助けることを求めている。そして，親友に対しては ($\chi^2(31) = 63.90, p < .01$)，男性は才能を育てることを求め，女性は自らを愛し，

癒し、甘えさせることを求めていた。最後に、友人に対しては ($\chi^2(31) = 47.79, p < .01$), 男性はわがままを聞くことを求め、女性は愛し、癒して、甘えさせることを求めていた。

IV. 考 察

1. 親密な対人関係に求める5つの機能群

本研究は5つの機能群を特定した。これらは、先行研究において親密な対人関係ごとに抽出された諸因子と重複的に対応している。親子関係(大島 2014)では、「教導」と「養育」が統制と、「愛着」が情緒的な関係性と対応する。恋愛関係(高坂 2010)では、「友情」の一部と「教導」と「愛着」が信頼・支援と、「友情」の残る一部と「交友」が積極的交流と対応する。そして、友だち関係(小塩 2013)では、「友情」の一部と「交友」が親密性機能、「愛着」が安定性機能、「友情」の残る一部、「教導」、「養育」が支援機能と対応する。以上の対応関係は、本研究が特定した機能群の汎用性と妥当性を示している。

親子関係・恋愛関係・友だち関係の全てが、「教導」や「愛着」に関する項目を含んでいた。本来、「教導」や「愛着」は幼少期に親がもたらす機能である。これらは発達に伴う自立プロセスにおいて、親から友だち、恋人へと引き継がれていく。しかしながら、完全に移行するのではなく、元の関係にも引き続き求められることが、本研究により明らかになった。以上、対人関係の実態や現象を機能のニーズの観点から数量的に検討することは、有効的なアプローチであると考えられる。

2. 対象に象徴される機能群の解釈

(1) 2次元を構成する軸の解釈

多重コレスポネンス分析によって、5対象と32機能が2次元平面に布置された。5対象は、父親-母親-恋人-親友-友人の順で、第4象

限から時計回りに第2象限にかけて並び、そのうち父親・恋人・友人が三角形を形成した(図1)。この対象の布置から、平面を構成する2軸を解釈することができる。x軸の座標は親友と友人が正の値で、恋人が0に近く、父親と母親が負の値を示していた。したがって、x軸は「関係の対等性」を表していると考えられる。この値が高いほど対象と独立した対等な関係にあり、低いほど一方的に依存する従属的な関係にあるということになる。一方、y軸の座標は恋人が正の値で、母親と親友が0に近く、父親と友人が負の値を示していた。したがって、y軸は「関係の情緒性」を表していると考えられる。この値が高いほど対象は情緒性が高く、低いほど道具性が高いということになる。

(2) 機能群の解釈

特定された5つの機能群は、近傍する対象の座標から解釈することができる。機能群のうち「教導」・「愛着」・「交友」は、三角形を形成する父親・恋人・友人にそれぞれ近傍していた(図1)。これら3対象のうち、父親はx座標の値が最も小さくy座標の値も小さい。したがって、父親に近傍する「教導」は、依存対象に面倒を見てもらおうとする機能の集合であると考えられる。一方、恋人はx座標の値が0に近くy座標の値が最も大きかった。したがって、恋人に近傍する「愛着」は互いが対等に依存する、すなわち相互依存的な関係に情緒的な結びつきを得ようとする機能の集合であると考えられる。そして、友人はx座標とy座標の値がともに最も大きかった。したがって、友人と近傍する「交友」は、対等な関係を自分のために役立てようとする機能の集合であると考えられる。

残る2対象のうち、父親-恋人間で父親寄りに布置した母親は、x座標の値が小さくy座標は0よりわずかに小さかった。したがって、母親に近傍する「養育」は、「教導」と同様に依存

的な相手に求められるが、「教導」よりも情緒性の高い機能の集合であると考えられる。一方、恋人-友人間でやや恋人寄りに布置した親友は、 x 座標の値がある程度大きく y 座標の値が0よりわずかに大きかった。したがって、親友に近似する「友情」は「交友」と同じく対等な対象に求められるが、それよりも情緒性が高い機能の集合であると考えられる。

3. 機能のニーズの重複性

表2から、機能は特定の親密な対人関係に対して求められるだけでなく、複数の関係に重複して求められることが明らかになった。特定の機能を誰か一人に求めることは、その人を失ったときに重大な社会的危機を招く。そのため、人は複数の対象と親密な対人関係を形成し、状況に応じてどの関係に何を求めるのかを使い分けるのである（若尾 2001）。

ただし、親密な対人関係によって求める機能に偏りが見られた。すなわち、親子関係には「教導」と「養育」を、友だち関係には「友情」と「交友」を選択的に求めている。一方、5対象の連なりの中央に位置する恋人との恋愛関係には「愛着」を求めるとともに、「養育」（No.10, 38, 40）や「友情」の中でも情緒的な機能（No.15, 18, 44）を併せて求めている。

この結果は、大学生が道具性の高い機能ほど対等な対象、または一方的に依存している対象に求め、情緒性の高い機能ほど相互依存的な対象（「関係の情緒性」を表象する x 座標が0に近い）に求めることを意味している。

4. 機能のニーズの性差

性差については、親子関係に対して、女性は同性である母親に多くの機能を強く求め、異性の親である父親にも「教導」や「養育」を求めている。一方、男性は同性の親である父親に人生の導き手としての役割を求め、それ以外の機

能は両親に対して女性ほど求めていなかった。これは、男性が親から自立することを要請されており、親に依存しづらいためと考えられる。先行研究でも、親からのサポートは女性の方が受けやすく（福岡・橋本 1997）、実際女性は青年期後期に達しても、親に対して情緒的な援助を求め続けることが知られている（池田 2000）。

恋愛関係については、男女とも情緒的な機能を幅広く求める点で共通するが、道具的な機能において性差が見られた。恋人に求める道具的な機能に関して、男性は身の回りの世話という母親的な機能を求めているのに対し、女性は護り助けてもらうという父親的な機能を求めている。この結果は、大学生が恋人を「異性の親」の代理として捉えている可能性を示唆している。

友だち関係については、本研究では親友と友人に対して同性・異性の区別をしなかった。和田（1993）は、友だちは同性の対象を指すことが多いと指摘している。同性の友だち関係は個人の重要なサポート源になっており（Bagwell et al. 2005）、中でも同性の親友は孤独感を軽減する上で重要な役割を果たすことが知られている（榎本 1997）。友人には主に「交友」や「友情」を求め、親友にはこれらに加えてより情緒的な「愛着」を求めるという結果は、主に同性の友だちに対する先行研究の知見と一致している。

以上、女性の方が親密な対人関係に依存しており、また男性は道具的機能を、女性は情緒的機能を多く求めるという知見が得られた。これは女性の方が男性よりも親や友だちへの援助要請の意図を持っており（永井 2010）、心理的問題の援助要請が高い（水野・石隈 1999）という先行研究と合致している。この結果は、機能のニーズが生物学的な差異の影響を受けることを示唆しているが、依然として伝統的な性役割が影響している可能性も排除できない。

V. 本研究からの示唆と今後の展開

本研究は、社会的交換理論の観点から、親密な対人関係が持つ汎用的な機能を特定した上で、大学生がそれらを親密な対人関係にどのように求めるのかについて検討した。その結果、5つの機能群が特定され、大学生は親子関係に「教導」と「養育」を、恋愛関係に「愛着」を、友だち関係に「友情」と「交友」を主に求めつつ、それらを他の親密な対人関係にも重複して求めることを明らかにした。併せて、親密な対人関係に、女性は男性よりも多くの機能を強く求めるのに対し、男性は道具的な機能を優先的に求めることを明らかにした。

これらの知見は、大学生の適応支援に関する実践的取り組みに示唆を与えるものである。彼らの実際の対人関係や充足状態の改善を促すためには、支援対象者がどの親密な対人関係にどのような機能を求めているのかを把握し、不足している対人関係や機能を充足するように働きかけることが望ましい。その際、男女によって機能ニーズに差異がある点に留意する必要がある。仮に支援対象者の機能ニーズが、本研究が示した平均的な傾向と著しく乖離している場合は、当人の機能ニーズ自体の改善を促す必要もあるだろう。

ただし、本研究には課題と限界がある。一つ目は、本研究は投資モデルを参照しながらも、コストや投資量、共有資源などを考慮していない点である。それは、本研究の目的が汎用的な対人関係の特定と、親密な対人関係に対する機能のニーズの解明にあったためである。今後、大学生の対人関係の予測と改善を行っていく際には、投資モデルが想定する他の変数を扱わなければならない。投資モデルにおいて本研究が目指した機能のニーズは、利益（報酬－コスト）を導くために必要な報酬の算定に必要となる。投資モデルに関する理論的な研究の多くが、満

足量という抽象的な指標によって利益量を測っている。しかしながら、実践的に大学生の対人関係の改善を促すためには、個人のニーズを正確に把握する必要がある。なぜならば、必要としていない機能の提供は、報酬量として低く見積もられるためである。

二つ目は、本研究が社会的交換理論に基づいているため、「親密な対人関係からどのような利益を受けるか」という受領的側面に照準している点である。当然ながら、一方的な依存よりも相互に依存し合う関係の方が望ましい。なぜならば、他者との親密な対人関係は、依存と支援の均衡が保たれた「互惠の相互依存関係」に他ならないためである（田中 2006）。川名（1985）は、人は自らの利益を優先するだけでなく、場合によっては、相手の利益を考慮に入れることもあると指摘している。特に親子関係や恋愛関係では、愛他的動機や義務感による不衡平な支援が行われることが多い。今後は、他者に利益をもたらす行動の効果にも目を向け、機能の授受に関する検討を行っていきたい。

三つ目は、親友と友だちの性別を区別せず、また恋人を一括りに扱っている点である。友だち関係の性別については、考察で述べた通りである。恋人の未分化については、恋愛関係にはパッション優勢、親密性優勢、コミットメント優勢の3段階がある（Sternberg 1986）。そのため、本研究では異なる段階の恋愛関係が混在していたことになる。今後は対象をより詳細に設定する必要があるかもしれない。ただし、同性の友だちと異性の友だちは別の概念として認識されており（McDougall & Hymel 2007）、異性の親友は恋人またはそれに近い存在として認識されやすい（竹内 2010）。そのため、対象の細分化が回答者の弁別的な評価を妨げる恐れがある。この点については対人認知の特徴を踏まえ、慎重に検討していきたい。

四つ目は、本研究が度数データを扱っている

点である。機能を特定する場合、因子分析によって因子を特定し、その妥当性を検証するのが一般的である。しかしながら、本研究は親密な対人関係に汎用的な機能を特定するために、対象×機能×回答者という三相構造のデータを扱う必要があった。このようなデータに通常の因子分析を用いることはできない。三相因子分析(豊田 2001) という手法も開発されているが一般的ではなく、得られる出力も対象と項目の座標である点で多重コレスポネンス分析と大差がない。そのため、本研究では頻度を扱った。今後は、本研究が特定した汎用的な5つの機能群を物差しとして、親密な対人関係ごとの、または特定の対象を想定させたリッカート調査を実施していきたい。

今後は基礎的研究を蓄積して、大学生の親密な対人関係に対する機能のニーズと心理的・社会的適応指標との関連性を明らかにするとともに、得られた知見を活かして、彼らの適応状態を高めるための実践的支援に向けて取り組んでいきたい。

引用文献

- 阿部洋子 (2016) 父親に対する娘の嫌悪感. コミュニケーション文化, 10, 1-10.
- 安達喜美子 (1994) 青年における意味ある他者の研究——とくに、異性の友人(恋人)の意味を中心として——. 青年心理学研究, 6, 19-28.
- Bagwell, C.L., Bender, S.E., Andreassi, C.L., Kinoshita, T.L., Montarello, S.A., Muller, J.G. (2005) Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 22, 235-254.
- Bowlby, J. (1969) *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Chodorow, N. (1978) *The reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. Berkeley: University of California Press.
- Cohen, S. and Wills, T. A. (1985) Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 江口恵子 (1966) 依存性の研究. 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 榎本博明 (1997) 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
- 榎本淳子 (1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. New York: International Universities Press.
- Foa, U. G. (1971) Interpersonal and economic resource. *Science*, 171, 345-351.
- 藤田ミナ・岡本祐子 (2010) 青年期後期における娘のとらえる母親との関係性. 広島大学心理学研究, 10, 201-216.
- 福岡欣治・橋本宰 (1995) 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係. 青山心理学研究, 43, 185-193.
- 福岡欣治・橋本宰 (1997) 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果. 心理学研究, 68, 403-409.
- Furman, W., Simon, V. A., Shaffer, L. and Bouchey, H. A. (2002) Adolescents' working models and styles for relationships with parents, friends, and romantic partners. *Child Development*, 73, 241-255.
- Grabill, C. M., and Kerns, K. A. (2000) Attachment style and intimacy in friendship. *Personal Relationships*, 7, 363-378.
- Havighurst, R. J. (1953) *Human Development and Education*. New York: Longmans, Green and Co.
- Hazan, C. and Shaver, P. R. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hazan, C. and Zeifman, D. (1994) Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.) *Advances in Personal Relationships* (vol.5, pp.151-178). London: Jessica Kingsley.
- 平石賢二 (2006) 青年期の親子関係の特徴. 白井利明 (編) よくわかる青年心理学. ミネルヴァ書房, 76-77.
- Homans, G. C. (1950) *The Human Group*. New York: Harcourt, Brace and World.
- 池田和夫 (2000) 日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究. 高知大学学術研究報告 人

- 文科学, 49, 105-113.
- 磯部紀子・内野悌司・鈴木康之・藤巴正和・岡本百合・林マサ子・土井由・黒崎充勇, 品川由佳・酒井祥子 (2006) 学生相談から見た不登校の現状. 総合保健科学, 22, 91-98.
- Josselson, R. I. (1973) Psychodynamic aspects of identity formation in college woman. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 神薮紀幸・黒川正流・坂田桐子 (1996) 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連. 広島大学総合科学部紀要 IV 理系編, 22, 93-104.
- 川名好裕 (1985) 対人的動機の数学的モデル. 対人行動学研究, 4, 1-8.
- Kelley, H. H. and Thibaut, J. W. (1978) *Interpersonal Relations: A Theory of Interdependence*. New York: Wiley.
- 北原香緒里・松島公望・高木秀明 (2008) 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響. 横浜国立大学教育人間科学部紀要: 教育科学, 10, 91-114.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015) 第15回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査-独身者調査の結果概要」(2017年10月21日取得 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp).
- 高坂康雅 (2009) 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と, 交際期間, 関係認知との関連. パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂康雅 (2010) 大学生における同性友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較. パーソナリティ研究, 18, 140-151.
- 高坂康雅 (2011) “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討. 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 小高恵 (2008) 青年の親への態度についての発達の变化: 心理的離乳過程のモデルの提案. 太成学院大学紀要, 10, 31-48.
- Le, B. and Agnew, C. R. (2003) Commitment and its theorized determinants: A meta-analysis of the investment model. *Personal Relationships*, 10, 37-57.
- Le, B., Dove, N. L., Agnew, C. R., Korn, M. S. and Mutso, A. A. (2010) Predicting nonmarital romantic relationship dissolution: A meta-analytic synthesis. *Personal Relationships*, 17, 377-390.
- Main, M., Kaplan, N. and Cassidy, J. (1985) Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- 松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990) 青年の恋愛に関する測定尺度の構成. 東京都立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- Maysel, O. (1993) Gifted adolescents and intimacy in close same-sex friendships. *Journal of Youth and Adolescence*, 22, 135-146.
- McDougall, P. and Hymel, S. (2007) Same-gender versus cross-gender friendship conceptions: similar or different? *Merrill-Palmer Quarterly*, 53, 347-380.
- 満野史子・今城周造 (2016) 大学生の友人関係様式と友人関係における困難および友人関係における方略の関連——関係形成期と関係維持期に注目して——. 学苑・人間社会学部紀要, 904, 21-33.
- 水野治久・石隈利紀 (1999) 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究, 47, 530-539.
- 永井智 (2010) 大学生における援助要請意図: 主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因. 教育心理学研究, 58, 46-56.
- 中村祥子 (2012) 対人関係におけるコミットメントに影響を及ぼす要因: 研究ノート. 東洋大学大学院紀要, 49, 73-81.
- 丹羽智美 (2005) 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. パーソナリティ研究, 13, 156-169.
- 落合良行・竹中一平 (2004) 青年期の友人関係研究の展望——1985年以降の研究を対象として——. 筑波大学心理学研究, 28, 55-67.
- O'Donnell, W. J. (1976) Adolescent self-esteem related to feelings toward parents and friends. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 179-185.
- 小川浩一 (1976) 現代社会学における交換理論の展開——ホマンズとブラウの場合——. 東海大学紀要文学部, 25, 96-104.
- 岡田努 (2007) 大学生における友人関係の種類と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 小野寺敦子 (2009) 親子関係が青年の無気力感に与える影響——エゴ・レジリエンスが果たす機能——. 目白大学心理学研究, 5, 9-21.

- 大島聖美（2014）青年の親に対する認知の重要性 青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から。広島国際大学心理学部紀要, 2, 69-78.
- 小塩真司（2013）大学生における想起された友人の特徴と友人関係機能との関連。早稲田大学大学院文学研究科紀要, 58, 5-19.
- Rusbult, C. E. (1983) A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 101-117.
- Rusbult, C. E. and Van Lange, P. A. M. (2003) Interdependence, interaction, and relationships. *Annual Review of Psychology*, 54, 351-375.
- 佐々木保行（1996）父親の発達研究と家族システム——生涯発達心理学的アプローチ——。教育心理学年報, 35, 137-146.
- 嶋信宏（1991）大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究。教育心理学研究, 39, 440-447.
- 下斗米淳（2000）友人関係の親密化過程における満足・不満足及び葛藤の顕在化に関する研究——役割期待と遂行とのズレからの検討——。実験社会心理学研究, 40, 1-15.
- Sternberg, R. J. (1986) A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, 119-135.
- 杉村和美（2001）関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因。発達心理学研究, 12, 87-98.
- Sullivan, H. S. (1954) *The Psychiatric Interview*. New York: W. W. Norton & Company, Inc.
- 社団法人日本私立大学連盟（2015）私立大学 学生生活白書（2017年10月21日取得 http://www.shidaiaren.or.jp/download?file_id=2912）.
- 武田裕子・石田弓（2013）青年期における両親への相談行動について—利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて—. 広島大学心理学研究, 13, 191-209.
- 竹淵香織（2016）大学生における人間関係の希薄化：対人不安を抱える学生と学生相談室で扱われる「相手のいない対人関係相談」の増加から。聖学院大学総合研究所紀要, 62, 156-167.
- 竹内由美（2010）大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係。心理相談センター年報, 6, 15-22.
- 竹澤みどり・小玉正博（2004）青年期後期における依存性の適応的観点からの検討。教育心理学研究, 52, 310-319.
- 田中優（2006）互惠的相互依存関係過程モデルの提案。大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 8, 1-19.
- 丹野宏昭（2008）大学生の内的適応に果たす友人関係機能。青年心理学研究, 20, 55-69.
- 内田千代子（2009）大学における休・退学、留学生に関する調査（第29報）。平成20年度学生支援合同フォーラム。第30回全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 30, 70-85.
- 豊田秀樹（2001）探索的ポジショニング分析——セマンティック・デファレンシャルデータのための3相多変量解析法——。心理学研究, 72, 213-218.
- 山口正寛（2009）愛着機能尺度（Attachment-Function Scale）作成の試み。パーソナリティ研究, 17, 157-167.
- 吉岡和子（2001）友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感。青年心理学研究, 13, 13-30.
- 和田実（1993）同性友人関係：その性および性別タイプによる差異。社会心理学研究, 8, 67-75.
- 若尾良徳（2001）青年期のアタッチメント対象は誰か？——安全基地現象の観点から——。東京都立大学心理学研究, 11, 7-15.
- 渡辺恵子（1997）青年期から成人期にわたる父母との心理的関係。母子研究, 18, 23-31.

（受稿日：2017. 6. 1）

（受理日 [査読実施後]：2017. 10. 18）

Original Article

Functions of Intimate Interpersonal Relationships of University Students: Comprehensive Approach from Relationships with Parents, Lovers, and Friends

FUJIMOTO Manabu

(Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University)

The aim of this study was to identify common functions of the intimate interpersonal relationships of university students and clarify what functions and from whom students demanded the relationships so as to improve their own mental and social adaptation. The following important relationships were focused on: parent-child relationships (father and mother), love relationships (lover), and friendships (best friends and friends). Participants completed a free description questionnaire; accordingly, 32 items of functions were collected. Subsequently, an inventory survey on the needs of functions asked of the five intimate individuals in the focused relationships was conducted. By means of multiplex correspondence analysis, the 32 functions were divided into five groups: "mentoring," "nursing," "attachment," "close friendship," and "fellowship." Thereafter, a χ^2 test was conducted. Results revealed that university students demanded mainly "mentoring" and "nursing" from parent-child relationships, "attachment" from love relationships, and "close friendship" and "fellowship" from friendships; moreover, the university students demanded a function from some relations redundantly. Last, with reference to sex differences, a χ^2 test revealed that male students mainly demanded instrumental functions, whereas female students were more likely to demand a wider range of functions than did male students from intimate interpersonal relationships. These findings suggest ways of supporting university students' mental and social adaptation.

Key Words : functions of interpersonal relationships, university students, parent-child relationship, love relationship, friendship

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.37, 47-62, 2018.
